「ものがあって当たり前、それだけで本当に大丈夫？」

～ 生きる力の原点回帰 ～

平成 26 年度 高知県実践的防災教育推進事業 拠点校　高知県立須崎工業高等学校

Ⅰ　学校における背景、問題意識

今後高い確率で起こると言われている南海トラフ地震や、その地震によって起こると予想されている津波に備え、生徒・教職員は自分自身を守る意識を高めることが必要である。また、本校は須崎市の緊急避難場所にも指定されているため、自らだけでなく、他の人たちを支援しようとする意識や態度の育成も望まれている。

今回の推進事業を受けることにより、先進地の訪問や防災に関する講演・演習を実施する等して、生徒や教職員の地震や津波等に対する危機意識を高め、実際の事態が起きた時に的確な行動がとれるように備えておかなければならない。

Ⅱ　取組のポイント

高知大学 原 忠 教授に委員長を依頼し、地域の関係者を実践委員とする委員会を発足させ、事業内容についてのアドバイスをもらいながら事業に取り組んだ。

本校は地域の緊急避難場所として指定されているものの、市行政や地域との連携は避難訓練までしか進んでいない状況であることから、本校が推進役となり地元自治体や地域住民を巻き込み、震災後の避難生活も視野に入れた事業内容を計画し、より具体性のあるものとした。

また、生徒、教職員のより一層の意識を高めるため、体育祭における防災関連種目の実施や、工業高校としての独自色をだした、モノづくりでの取組を行った。

さらに、県内外の先進的な学校の取組や施設の視察見学等を行い、教員による防災ＬＨでの公開授業を実施した。最後に課題研究発表会で防災に関するモノづくりの発表会を行い、取組の総括を行った。

Ⅲ　取組の概要

1　学校教育目標

地域・社会に貢献する工業技術者の育成

2　防災教育の目標

- 基本的な知識を身につけ、思考・判断力を養う。
- 危機が予測でき的確な行動ができる力を養う。
- 社会の構成員として貢献できる力を養う。

3　防災教育で身につけたい力

- 地震、津波について理解する。
- 自分の命は自分で守ることができる力
- 自分でできる役割を考え行動できる力
- 安全、安心な社会づくりに貢献できる力

１年次：知識、思考・判断

防災基礎知識
- その日のために備える
- 学校、通学中、家庭で地震が発生したときの対処法
- 減災について学ぶ

２年次：危険予測と行動

災害時の判断と行動
- 災害発生時の対応
- 避難生活初期にできること（すべき役割）
- 救急救命と応急処置

３年次：社会への貢献

生き抜いていくには
- 避難所における生活の在り方と役割
- 災害ボランティア活動
- 自主防災活動

4　取組内容

（１）効果的な避難訓練の実施

緊急地震速報を使った避難訓練（４月28 日）を実施し、避難経路や避難方法の再確認をした。また、地震、津波に関する基本的な講話を行った。

【地震発生時の初期行動】

【防災に関する講話】

須崎消防署支援のもと、地震と火災を想定した避難訓練（12 月 22 日）後、地震発生時の行動と初期消火についての体験学習を実施した。また、阪神・淡路大震災と東日本大震災における特徴と被害を大きくした原因についても学習した。

【火災に関する講話】

【初期消火訓練】

実際に揺れを体験し、地震に対する判断力を育成するために起震車体験学習（１月 16 日）を実施した。

【揺れ体験学習】

（２）地域や防災関係機関との連携

全教職員が救急救命法講習（７月３日）を受講した。命を預かる現場としての再認識と救急救命について学習でき、次年度からは２年生も対象とした講習会を予定している。

【救急救命講習会】

須崎市総合防災訓練実施に向けて、須崎市地震防災課・須崎消防署の支援を得て、事前学習会（７月 18 日）を実施し、災害時における基本的な支援の学習ができた。

【総合防災訓練事前学習会】

９月 21 日に地域・行政と一体となった須崎市総合防災訓練を実施した。

地区医療救護所設置運営訓練、食糧配給訓練、地区避難所運営訓練、耐火建物火災逃げ遅れ者救出訓練、防災ヘリ救援物資搬送訓練のグループに分かれ実践力の育成に努めた。

【須崎市総合防災訓練への参加】

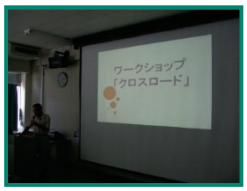
（３）防災に関する指導方法の開発・普及

春の遠足（５月２日）で、海や河口の危険性と避難所における食の工夫（炊き出しの道具）について学習した。（清掃活動含む）

【食の工夫学習】

８月 27 日に生徒、保護者、教職員で防災先進地域視察研修を実施した。兵庫県立舞子高等学校を視察し、環境防災科の取組を学び災害に対する意識を高めた。

【兵庫県立舞子高校　環境防災科の取組】



【クロスロードによる防災学習】

10 月６日防災ＬＨ（特設５・６時限）で、「南海トラフ巨大地震に備えて私たちは今後何をすべきか」について学習した。

【伊野商業高校：谷内康浩先生の講演】

10 月 29 日「私の震災体験」と題し、石巻みづほ幼稚園 津田廣明 園長の講演会を開催し、被災体験とその後の対応、復旧・復興への取組について話を聞き、地震・津波に対する知識の定着を図った。

【石巻みづほ幼稚園：津田廣明 園長の講演】

防災学習のまとめと次年度に向けての取組について、各学年単位で防災ＬＨ（公開）（12 月 15 日）に取り組んだ。

【１年：その日のために備えよう】

【２年：負傷者の搬送法】

【３年：災害時におけるボランティア活動】

防災の視点を入れた学校行事として、体育祭で２種目の防災競技を実施し、防災意識の向上を図った。

【３年：背水の陣】

【全学年：レスキュー】

12 月 25 日～27 日まで国立淡路青少年交流の家における全国防災ジュニアリーダー育成合宿に学校代表として２名が参加した。全国から高校生や中学生が集まり、防災・減災について学習するとともに、実際に被災された方の話を聞き、防災ジュニアリーダーとしての第一歩を踏み出した。全校への報告会も実施した。

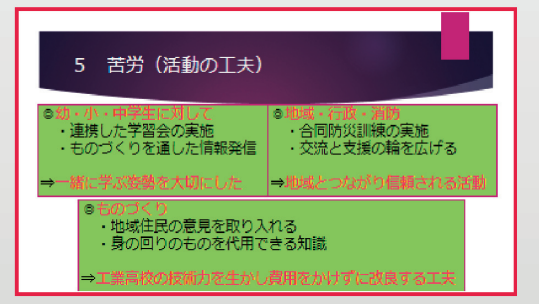
【全国防災ジュニアリーダー育成合宿】

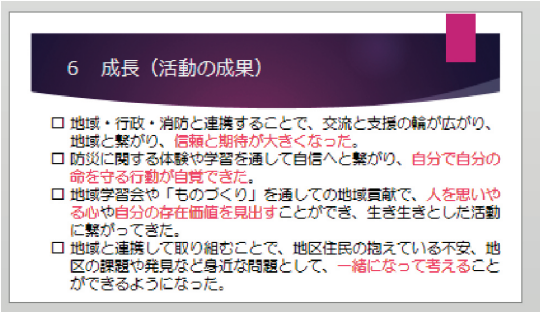
１月 11 日に神戸市の兵庫県公館で開催された１.17 防災未来賞「ぼうさい甲子園」表彰式・発表会に出席し、成果発表のプレゼンテーションを行い、「優秀賞」をいただいてきた。全国から小・中・高・大学生が集まり、防災・減災についての取組の発表があり、多くのことを学習するとともに、全国規模の防災ネットワークづくりができた。

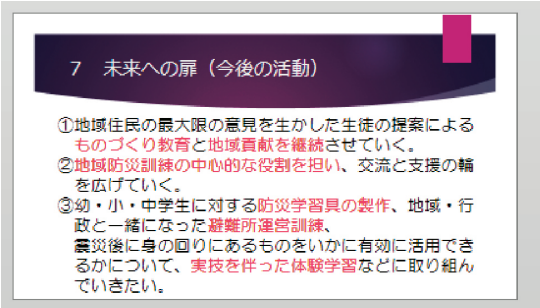
【「ぼうさい甲子園」表彰式・発表会】

高知県防災教育推進フォーラム（２月１日）で「平成 26 年度高知県防災教育推進事業拠点校」として防災学習の取組の成果を発表し、防災対応能力の向上と防災教育の推進を図った。

【防災教育推進フォーラム発表】







【生徒の発表資料から】

課題研究発表会（２月４日）で防災学習の取組の成果を発表し、防災対応能力の向上と防災教育の推進を図った。（須崎市立市民文化会館：中学生 359 名含む 779 名参加）

【課題研究発表会：学習成果発表】

（4）保・幼・小・中・高合同の防災活動

地域連携学習会として、近隣の保育園児に「津波の紙芝居」の読み聞かせを実施し、教えること、伝えることの大切さ、ともに学ぶ大切さを学習した。

【保育園での紙芝居読み聞かせ】

【津波の紙芝居】

Ⅳ　成果と今後の取組

1　取組の成果

今回の推進事業において、「自助」自ら命を守る力、「共助」互いに助け合う力、「共生」互いに生き抜いていく力の育成を目的に、以下の３点を重要課題として取り組んできた。

①生徒や教職員の防災に対する意識とスキルを高め、主体的に行動できる態度の育成
②本校は須崎市の緊急避難場所として指定されていることから、地域の防災関係機関等との連携体制の構築・強化を図り、避難所としての役割を担える人材の育成
③工業高校の特色を活かした防災に関するモノづくりや地域連携学習を通して、防災の拠点校としてのジュニアリーダーの育成

取組の成果として、次のようなことが挙げられる。

◎講師を招聘しての講演会や『高知県安全教育プログラム』を活用したロングホームルームにおける授業実践により、地震・津波等に対処するための必要な知識とスキルを身につけることができ、同時に教員自身の意識とスキルを高めることができた。また、生徒や教職員の防災に対する意識とスキルが高まることで、学校の教育活動全体を通して防災教育を実践する体制が整備できた。

防災教育の全体計画・指導計画により、継続的な取組ができるようになった。

◎市行政・消防署・地域と合同で総合防災訓練（救護活動・医療救護所設置運営訓練、炊き出し・食糧配給訓練、避難所運営訓練、耐火建物火災逃げ遅れ者救出訓練、防災ヘリ救援物資搬送訓練）を実施し、実践力の育成に努め、避難所としての役割や運営を担える人材の育成に向けた取組体制が整った。

◎「ぼうさい甲子園」や「全国防災ジュニアリーダー育成合宿」に参加することで、多くのことを学習するとともに、全国規模の防災ネットワークづくりができた。また、防災の拠点校として、工業高校の特色を活かした防災に関するモノづくりや地域連携学習を通して、地域における防災学習や情報発信の中心的な役割を担えるようになってきた。

2　今後に向けて

●主体的に行動できる態度の育成

学校の教育活動全体を通して、質の高い防災教育を継続させ、さらなる防災意識の向上を図り、「基本的な知識の理解、適切な思考・判断力」「危機が予測でき、的確な行動ができる力」「社会の構成員として貢献できる力」を養う。

●地域の関係機関等との連携

市行政・消防署・地域との連携をさらに強化し、避難所生活を想定した運営訓練を実施し、実践力の育成と、避難所としての役割や運営を担える人材の育成に努める。併せて地域の緊急避難所としての体制（須崎市や地域と連携した避難所運営マニュアルの作成等）を構築していく。

●モノづくりを通した防災学習や情報発信の中心的な役割を担う

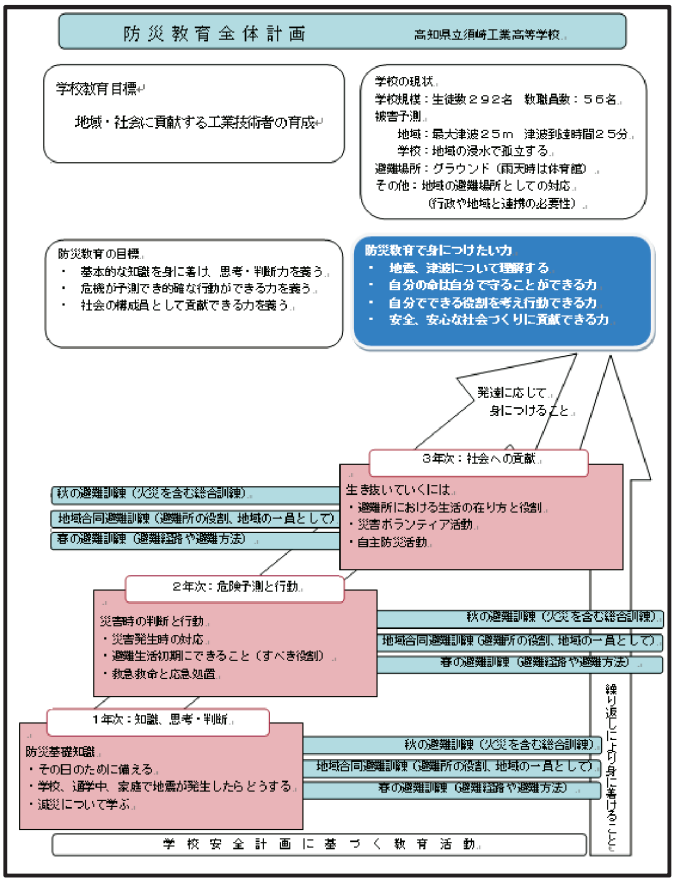
生徒防災委員会をさらに活性化し、全国規模の防災ネットワークの活用や各種イベントへの参加等、交流と支援の輪を広げ、自主的な生徒の取組を活性化させ、意識とスキルを高める。

防災に関するモノづくりを継続させ、情報発信や発表会の開催、地域貢献で

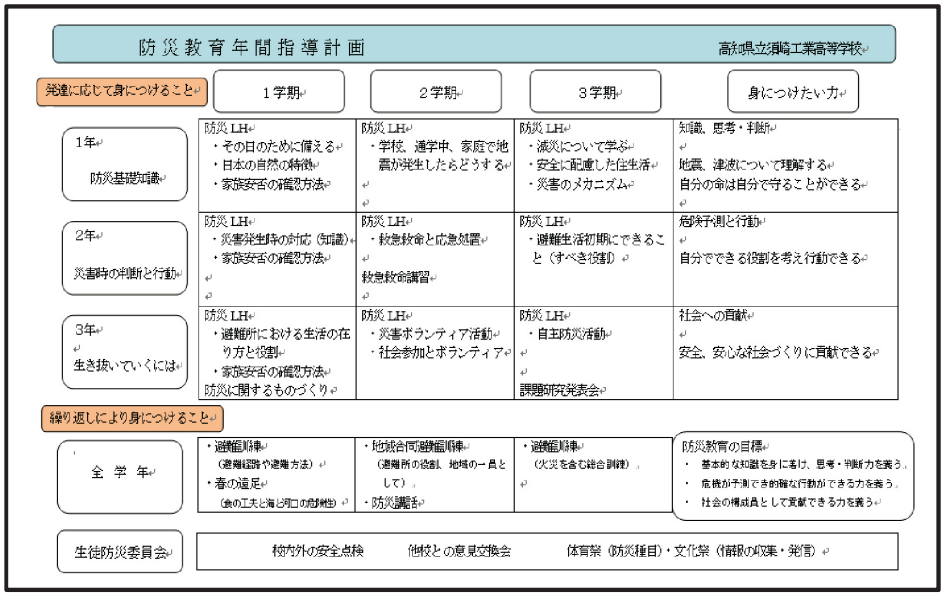
人を思いやる心や自分の存在価値を見出し、生き生きとした活動に繋げる。

保・幼・小・中学生に対する防災学習具の製作と学習会の実施、地域・行政と一緒になった防災学習について取組を推進する。

【防災教育全体計画】



【防災教育年間指導計画】



【アンケートから】

防災意識調査アンケートを年度当初と年度末の２回実施し、取組の検証を行った。

第１回目の調査において、「地震発生時の安全の確保」「地域で起こる可能性のある被害」「避難する安全な場所」について、「できる」・「知っている」と答えたのは生徒の約６割で、避難訓練と講話の直後であったにもかかわらず、期待したほどの結果が得られなかった。そこで、アンケートの意図として、冬休み明けの防災意識の希薄であろう時期に第２回目を実施し、定着度合いを測る資料とした。第２回目の調査結果では、同様の問いに対して、約８割の生徒から「できる」・「知っている」という回答を得ることができた。「防災に関する意識が希薄な頃」と推測される時期にもかかわらず「できる」・「知っている」のポイントが上昇した。生徒の知識とスキルが一定向上したことがうかがえ、本年度防災教育に取り組んできた成果と防災教育の定着度合いであると推測できる。

今後、生徒の意識・スキルのさらなる向上を図るためには、より緻密な計画に基づいた継続的な取組が必要である。特に、様々な状況に対して備えることができ、適切な行動ができる知識とスキルを身につけ、生徒から家庭・地域へ情報発信できるよう意識の向上を図っていく。

また、ロングホームルームだけでなく、各教科での防災教育の取組を推進する。